

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：34418

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01232

研究課題名（和文）アンデス高地における海の文化

研究課題名（英文）Culture of the Sea seen from the Andean Highlands

研究代表者

加藤 隆浩（Kato, Takahiro）

関西外国語大学・国際文化研究所・研究員

研究者番号：50185849

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：この研究の究極の目的は、アンデス山脈の高文明の繁栄に太平洋沿岸の海洋文化がどのように寄与し、それが現在どのような形で残存しているかの実態を解き明かすものであった。この研究のきっかけは、これまでの現地調査や民族画像の整理のなかで、山岳地方に海岸地方の品々や宗教儀礼などが見られたことである。そこでこの研究で現地調査をしてみると、アンデス高地と呼ばれる山間地なのに海の要素が検出でき、いくつかの文化要素は、山の文化の基層の重要な要素にもなっていることが分かってきた。この研究により、海の側から山の文化を見る眼差しの重要性が分かってきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、アンデス文化を専ら灌漑農耕文化に還元してきた従来の文化形成論を刷新し、これまで関心の薄かった太平洋沿岸の葦舟海民に注目し、アンデス文化をより広い脈絡の中で考察することで、海民が山岳地域に与えた影響を検証することにある。具体的には、海民による海上の長距離交易、アンデス内陸部への食糧供給、巡礼時の物々交換、農耕儀礼と招漁儀礼の並行関係などに着目し、山間民族による統治ゆえに過小評価されてきた海民の経済・宗教的潜在力を明らかにするとともに、アンデスの山間部の「海の文化」の変遷のメカニズムを解明する。

研究成果の概要（英文）：The ultimate purpose of this study was to determine how the maritime culture of the Pacific coast contributed to the development of the high civilization of the Andes, and how it survives today. The clue for this research came from the discovery of coastal artifacts and religious rituals in the mountainous regions during my previous field research and the arrangement of ethnographic images. Therefore, field research for this study revealed that even though this is a mountainous region called the sierra, elements of the sea can be detected, and some cultural elements are also important elements of the mountain culture substratum. This study has revealed the importance of the point of view to the mountain culture from the sea side.

研究分野：文化人類学および民俗学関連

キーワード：アンデス 海 儀礼 漁民 漁労 交易

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

- (1) アンデス地域の文化形成については、古代の目立つ高文明（たとえばインカ帝国）が標高の高い山岳地域で繁栄したことから、山と文明との結びつきがことさら強調され、そこからすぐ西側にのびる太平洋沿岸地域への関心はほとんど高まらず、不当にも等閑視されてきた。しかし、先人等の研究を注意深く再検討し、今なお海岸地方で細々と伝統的漁業で生計を立てている海民の社会や文化を観察してみると、政治的には優位であった高地が、さまざまな側面、とりわけ経済、宗教、交易などで海岸部に大きく依存していたことが見えてくる。
- (2) だとすれば、アンデス文化は、これまで自明の事柄として考えられてきたような純粋に山間部だけで生成された文化ではなく、海岸の文化を基層に巻き込んだものと考えなければならない。もちろんアンデスの山岳地域の文化に海の文化が混在するということが、それほど重大か、という問いがでてくるかもしれない。これまで、アンデスの文明論は、一部を除けば、山地の生態系を前提とし、山を世界観のモデルとして考案され流布してきている。したがって、海の文化を含めて検討ということになれば、従来のアンデス論は一定の変更を余儀なくされる可能性が出てくる。

2. 研究の目的

アンデス山岳地域の文化形成については、その発展が山岳地域内だけで自己完結してきたと、あたかも定説であるかのように信じられてきたが、しかし、それは報告者のそれまでの海岸地域での現地調査や民族画像の解析等の結果とは大きく食い違っていた。そこで、本研究は上記の齟齬を踏まえ、以下の1～3の段階的なゴールの設定により、アンデス山間地域の文化形成のプロセスならびにアンデス文化史を再検討しようとした。

第1のゴール

定説にとっては不都合な事例を可能なかぎり多く指摘し、多数の実証データを提示することで、まずは、定説が万能ではないこと、またそれには限界があることを明らかにする。なぜなら、例外的ではあるがこれまでも海岸地方の文化要素が、山間地域の社会・文化にも検出できるという指摘があったが、先達のそうした言及にもかかわらず、時期尚早とか、一地域のデータを無批判に敷衍してよいものかといった懐疑論がそのつど提出され、論争にまでは至らず、最終的には等閑に付されてきたからである。そうした過去の研究動向に目を向け、先達と同じ轍を踏まないためには、実証的データの質と量の確保し、論争のできる環境を整えることを第1の目的とした。

第2のゴール

すでに手元にあるデータと、この研究を通して入手する実証的なデータをあわせて吟味し、それが定説を完全に否定できるものかどうか、またその不都合な資料が定説の本質とは関わらないものであり、定説がほんの少し修正を加えればよいものであるかどうかなどが問われなければならない。そのためには、山岳地域の文化に影響を与えたと考えられる太平洋沿岸の海民、とりわけ葦舟海民に注目し、アンデス文化をより広い脈絡の中で考察することで、海民が山岳地域に与えた影響を検証することにした。具体的には、海民による海上の長距離交易、アンデス内陸部への食糧供給、巡礼時の物々交換、農耕儀礼と招漁儀礼の並行関係などに着目し、山間民族による統治ゆえに過小評価されてきた海民の経済・宗教的潜在力を明らかにするとともに、アンデスの山間部の「海の文化」の変遷のメカニズムを解明する。そして、より多くの実証的なデータを集積し、旧来のアンデス文化史観の偏りを正し、必要があれば、それを刷新するところまで視野に入れておく。

第3のゴール

第1、2のゴールは、アンデス地域の文脈で問題を考えるものだが、この研究は、アンデス地域だけにとどまらず、それ以外の海民の研究に寄与すると考えた。文化人類学、民族学の研究ではアジア・ポリネシアなどの一部地域を除けば、海洋文化研究への関心は著しく低く、その数は圧倒的に少ない。海のネットワーク、交易網、海民と農民文化との相互関係、社会階層等についての研究はさらに不足している。その意味でこの研究は人類文化のダイナミックな動きを解明する重要な事例を提供し、文化人類学・民族学の海民研究をさらに発展させる基盤とする目的もあった。

3. 研究の方法

すでに述べたように、アンデス高地の文化形成は、これまで山間地域内だけで自己完結し、その要素は専ら灌漑農耕文化に還元できると、定説のように考えられてきた。しかし、そうした説を否定するような議論がなかったわけではない。しかし、論戦を展開するには実証的な証拠が少なすぎた。そこで、これまでとは異なる研究法が重要になってくる。方法は大きく分けて2つある。

- (1) 海岸地域に関する従来の研究は、専ら考古学の成果をそのままなぞることが多かった。また、エスノヒストリー研究は、研究対象となる地域についての古文書の有無に左右され思うように研究の幅を広げていくことはできなかった。したがって、この研究では、これまでほとんど例のなかった海民社会に着目し、彼らの社会や経済、宗教等に関する民族誌的資料を蓄積しながら分析を進めていく。
- (2) エスノヒストリーの分析資料の多くは文書だが、この研究では、文書に加えて民族誌的画像、古地図の利用を考えた。

4. 研究成果

世界で猛威をふるった新型コロナウイルスの影響で、フィールドワークを基にして実証的な研究を進めようとしたこの研究は、2020年4月つまり計画の開始から大きな変更を強いられることになった。日本だけでなく、この研究の対象地域であるアンデス諸国(エクアドル、ペルー、チリ)の国境が事実上封鎖され、アンデス地域では、ロックダウンと戒厳令の発出が続き、実質的に丸2年の間調査地を訪れることがかなわなかった。しかしその間、オンラインで研究協力を依頼している現地の研究者と意見交換・情報交換を実施しつつ、過去に集めた資料やデータの解析を行いながら、現地調査のできる日を待った。そのために、科研の資金には手を付けず、それが丸々次年度に繰り越されることになった。また、研究期間の延長を願い出てそれを認められ、調査研究を令和5年度まで猶予していただいた。結局、パンデミック、円安の亢進、航空運賃の急騰などで、調査地や調査期間を大幅に縮小するなど工夫し、次のような成果を得た。

- (1) (2022年の成果) 海岸部と山間地域との交流については、これまでの分析から、土器や海産物(食料、儀礼用品)がもたらされたが、宗教観念(山をめぐる民間信仰)、コスモロジー、儀礼(豊穡儀礼、招魚儀礼、人身供儀など)なども、これまであまり注目されることはなかったが、思いの外、山間地域の文化の基層の形成に大きな影響を与えてきたことが判明してきた。海岸部と山間部の文化の比較をする場合、どのような条件がそらえば伝播の結果と言えるか、また伝播が認められるからと言って、その文化要素の意味に変容が起こった(あるいは起こっていなかった)かどうかを如何にして判断できるのか基本的なところでペルー人カウンターパートの研究協力者と議論になった。また、その議論のなかで、アンデスの「海民」「海民文化」の概念とその中味についても論議され、アンデス沿岸部だけで3から5の文化圏を想定できるのではないかという新しい問題が提起された。
- (2) アンデス沿岸部のパイロット研究としてペルー北部海岸地方における海をめぐる信仰と習俗、とりわけ沿岸住民の世界観における海の位置づけと信仰との関連、およびインカ期のママコチャ「母なる海」との歴史的・象徴的連関を探る目的で、ペルー共和国ピウラ県パイタ市街地および漁村ヤシーラで現地調査を実施した。海民の信仰であるにもかかわらず、ママコチャの存在感が薄く、他方、それをカバーするかのようには聖ペドロ・パブロ信仰の亢進が見られることに気づいた。興味深い現象であるので、今後の課題としたい。
- (3) アンデス高地で海の文化がどのように生きているかを見るためのパイロット研究としてピラコ地区で実施した。そこではコロプーナ山が山上他界として崇拝されており、インカ期の巡礼地であった遺跡が点在している。興味深いのは、そこからインカ期の生贄のミイラが複数発見され、その副葬品がムコ貝製の装飾品や人形であったことである。ムコはアンデス沿岸部それも北部でしか獲れないことが分かっており、それが、高地の他界と結びつく場所から出土しているのは、きわめて興味深いことである。こうした民族誌的データが今後、沿岸部の海上他界との結びつきなどの可能性を検討したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 加藤隆浩
2. 発表標題 ドラ・マイエル作「セルバのドラマ」
3. 学会等名 アンデス・アマゾン学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Wilfredo Kapsoli y Takahiro Kato
2. 発表標題 Etnohistoria de la Asociacn Pro Indigena
3. 学会等名 Presentaci@on del libro de la Univwrisidad de Ricardo Palma
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Takahiro Kato, Wilfredo Kapsoli y otros	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Tarea	5. 総ページ数 633
3. 書名 El deber de la asociacion pro indigena	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------